図書館だより

市立図書館

《香北・物部分館》図書館情報システムが導入されます

昨年の本館に続き、香北・物部分館へも図書館情報システムが四月から導入されることになりました。それにともない三館の蔵書・資料が共有され、約五万冊の中からお探しの本を館内のタッチパネルや家庭のパソコン（インターネット）で検索できるようになります。

◆利用カードは三館共通

分館で本を借りるとき、利用カードが必要になります。三館共通の利用カードになりますので、本館の利用カードをお持ちの方は、そのまま分館でもご利用いただけます。

まだ登録されていない方は、カウンターで登録申込をお願いします。

《本館》臨時休館のお知らせ

蔵書点検のため、三月十七日（月）～二十日（木）は、市立図書館（本館）をお休みさせていただきます。

新着本の紹介　物部分館

［大人向け］
▽心霊探偵八雲シリーズ（神永学）▽楽しみは創り出せるものよ（ターシャ・テューダー）▽笑って長生き（昇幹夫）▽東京・地震・たんぽぽ（豊島ミホ）▽映画篇（金城一紀）

［子ども向け］
▽どうぶつゆうびん（あべ弘士）▽どんなかんじかなあ（和田誠）▽おしり（さとうあきら）▽花仙人（松岡亮子）▽タイムカプセル（折原一）

おすすめの１冊

守護天使

（著：上村祐／宝島社）

太っていることを理由にリストラされ、家では鬼嫁や息子、飼い犬にまでバカにされている50歳中年男。悲哀とも思われるこの主人公が電車の中で出会った女子高生に恋をする。

そんな主人公の繰り広げる数々の出来事がユーモラスに描かれており、そのダメ男ぶりに何度も声を出して笑ってしまったが、最後はぐっとくるような感もあり、とても面白く読みやすい本でした。

（物部町・女性）

香美市立美術館　アートの窓

収蔵品を中心に
「深沢幸雄・中林忠良 展」ー銅版画への二人の挑戦ー

開催中～3月23日（日）

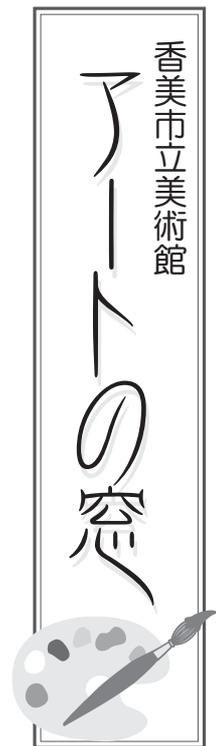
現在、市立美術館では、日本を代表する銅版画家の二人展を開催しています。今回の展覧会の見どころをお伝えします。

深沢幸雄は、独学で銅版画を学び、初期のモノクロ銅版画の時代、メキシコ古代文明とのであい―叙事詩の時代、叙情詩の時代、心象的叙情の世界、人間への眼差し（人シリーズ）とテーマ、作風ともに変化しています。特にメゾチント技法が生みだすカラー銅版画が見どころです。近年のガラス絵は、まるで絵画の宝石と言える美しさを放っています。

現在、日本版画協会理事長を務める中林忠良は、東京芸術大学で駒井哲郎に師事し、自らも長く母校で銅版画の指導にあたってきました。国内外で多くの賞を取ってきた中林の白黒の腐食銅版画を、初期から近作まで一堂にご覧いただけます。

二人の人生をかけて取り組んだ銅版画をぜひご覧ください。

（館長・北　泰子）

「転位'07-地-Ⅱ」中林忠良

【短歌】

楠瀬　兵五郎　選

亡き人の鶏小舎屋根の落ち崩れ今年残りし鶏に水やる　小野寺朱実

ひとときを遊びやらむと思ひしに塾に行くべしと連れ去られたり　小原　子川

ふと見れば窓の外には雪が舞ふ税申告を書く手冷たく　有澤　春江

過ぎにしは裡に納めて生きるべし花芽を持ちて冬こすものら　門田　喜美

痛む足いたわり歩む風の中ニラ香る家にふと立ち止る　公文多賀子

訪ね来ればかかる寂しさ父も母も姉もいまさぬ広島の家　森本　幸美

柿採りに落ちて入院懲りもせず高所の松の手入れに励む　高野　和一

一人ねの夢に亡き夫若かりきそっと寄り来て抱きしめくれぬ　池内　松美

青春の欠片のやうに雨の夜の玄界灘に漁火ひとつ　中西　敏子

ただ一度ゆずを求めし農協よりパンフレット届く十余年来　尾立　かよ

山茶花の枝は切らずにと頼み来てピンク美し年々の花　横田直加子

黄葉がひと際輝く霜の朝鵯は群れなし工科大へ飛ぶ　伊藤　清子

スーパーの目刺のように整列し雲長々と西へと並ぶ　佐々木真里

肉体の子は持たなかったお花の子残しおきたいと切に言う先生　古谷　由美

吾が恩師日頃の労苦報われて市民賞の知らせ吾れに届けり　高田　清子

機能性七十五てんと医師は言ふ吾が利き腕のこれからのこと　小野川恵仁

寒ければ雨戸閉めたり冬の夜をイニシャル入りの湯たんぽと眠る　都築　初代

診察の終りて主治医言いたまうよいお年をと今年もわずか　竹村　稔美

年末に活けし十日の水仙の香るごと生きたし来春の吾も　山﨑　緑

朝あさの梅のつぼみを確かめて吾も負けじと寒風の中　森　晶子

山田史跡めぐりの歌を口遊む亡き師を夫を兄をしのびて　竹村　松子

榾木組む子の傍なる風の昼はつしはつしと竹群は鳴る　大岸由起子

喧騒の街に降り立つ妹を思へり正月三日を過ぎて　古川　安子

漉き槽を混ぜるとチクチク肌を刺すウオーターレタスを紙に漉くわれ　宮地　亀好

アルバイト年末年始続けおりロックバンドに燃える青年　横山　淑子

堪ふること如何にかきびし立ち向ふ君がこれからの日々を思へば　小松もとみ

三年は長しみじかし柿もりて明るき卓にいまさぬ一人　佐竹　玲子

峰の家の工房に入り汝の焼く茶わん買はむとあれこれ選ぶ　坂上のぶ子

煮凝りのつるりと溶けてわが舌に郷愁をよぶ亡き母の味　大石さち子

八十八ケ所詣り始めてここ一年心穏やかになりて満願　森本真理子

台所電化の便利また不便午後の紅茶の飲めずなりたり　三宮のり子

信号に止まる車と人の前ほしいがままに飛び交う燕　山下　弓枝

一人背に一人手をひき見送りし駅の別れが今生最後　田村　房子

山雀は朝早くから餌くれと袋など探す仕草かわゆし　坂本　好

刈後の蘖ふたたび黄の色に染まりおだしき冬の日を浴ぶ　吉本　悦子

玉砂利を踏みて妹と初詣で松の緑のさやけき中を　公文　千恵

百年を越して伸びゆく庭の松人生に夢を語るがごとく　谷内　務

珈琲の湯気の向かふに面影が見え隠れする春の午後なり　山﨑　貴子

綿菓子のやうな雲間をくぐり抜け龍馬空港に旅は終はりぬ　大石　綏子

杖つきて歩く朝の塩の道古人のエネルギー吾に降りくる　門田　明子

その昔学びし顔が重なれり一人ひとりが過ぎゆきを言ふ　北村佐喜子

大根の列なす畑を見渡せりあす朝引かむ目積りをして　公文　正子

暖冬を喜ぶべきかわが畑のキャベツは日々に太りつつあり　高橋　章

つゆの味良きを確かめ雑煮餅揃ふを待ちて焼網に載す　武内　弘子

夜の明けの大葉ハウスより聞こゆるは西洋の楽かやさしき旋律　竹村　咲子

仰向きて松の剪定をする庭師背に師走の風がまつはる　出原　久子

肌をさす北山颪風花の梅の花片ともなひて舞ふ　鍵山　みつ

年明けて三日のこころ久びさに向き合ふ赤い花花蕊ながく　楠瀬兵五郎

※俳句・短歌の応募は、企画課内広報委員会事務局まで。